

# 願生浄土の自覚道

——歸命と願生——

小野蓮明

—

親鸞は『教行信証』「証卷」の最初に、選択本願の行信に実現する浄土真宗の仏道の内実を語って、

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。  
(『真宗聖典』二八〇頁)

といい、また『唯信鈔文意』では、

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。  
(『聖典』五五二頁)

と述べている。「往相回向の心行」すなわち選択本願の行信の獲得において、「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」なるものが、「即の時に大乘正定聚の数に入」り、「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」といって、本願の行信に実現する浄土真宗の仏道は、基本的に「本願一実の直道、大般涅槃無上の大道」(『信卷』・『聖典』一三四頁)であるといわれている。

親鸞が「よきひと」と仰ぎつづけた師・法然の念仏の教えは、基本的に念仏往生、往生浄土の仏道であった。親鸞がいま自覚的に目覚め立った本願の行信の仏道は、法然の仏道理解を継承しながら、さらに一層根源化して「大般涅槃無上の大道」と捉え、願生浄土の自覚道と顕揚されたのである。いま、その意義を尋ねて見よう。

まず最初に確認しなければならないことは、煩惱具足の凡夫なるものを「即の時に大乘正定聚の数に入」らしめ、「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」という、「正定聚の機」を成就する「往相回向の心行」とは何か、ということである。「往相回向の心行」とは、『唯信鈔文意』で「無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば」といわれているように、本願の名号の信樂、すなわち如来の大悲願心に帰し、如来の本願招喚の勅命に覚醒された一心帰命の信である。本願の名号に喚び醒まされた一心帰命の信において、「即の時に大乘正定聚の数に入」り、「必ず滅度に至る」ものとなるのである。親鸞は、煩惱成就の凡夫を、煩惱具足のままに無上大涅槃にいたらしめ、大乘正定聚の数に入らしめる「本願の名号」が、真宗仏道の真実の法であることを「大行」と顕揚し、大行に開かれる根源的覚醒を「大信」と捉えて、本願の名号に帰する一心帰命の信を、つねに「選択本願の行信」と了解されたのである。そして、この行信の一道こそが、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であることを力を込めて語り続けるのである。

親鸞は、生死罪濁の群萌に無上涅槃の功德を開示する行信について、真実の行願を諸仏称名の願に、真実の信願を至心信樂の願に見定めて、この行信を成就する二つの本願を選択本願と了解されたのである。親鸞は、真実の行について「行巻」で、

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。

といい、また「信巻」で真実の信を語って、

大信心はすなわちこれ、(中略)証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなわちこれ  
念仏往生の願より出でたり。〔聖典〕(一一一頁)

と述べている。この行信理解で注意すべきことは、真実の行について、「この行は、大悲の願より出でたり」といい、  
また真実の信についても、「この心すなわちこれ念仏往生の願より出でたり」といって、行・信ともに選択本願を根  
拠となし、選択本願と同一の事柄として理解されている、ということである。

さらに注意すべきことは、親鸞が行信の根拠を選択本願にあることを明らかにするとき、因願の文のみでなく、そ  
の成就の文をもつねに併せ掲げていることである。親鸞は、真宗仏道が「誓願一仏乗」として、本願を根拠として成  
り立つ仏道であるというとき、本願の教説以上に本願成就の教説、本願の成就ということのもつ意味に、最も深い関  
心と注意を寄せている。それは、親鸞が本願成就の教説に、自らが「よきひと」法然に出遇って念仏者と転成し、尽  
十方無碍光の世界に甦って生きるものとなった、いわゆる仏者としての立脚地をこの本願成就の教説に読み取ったか  
らであるに違いない。称無碍光如来名という真実の行が諸仏称名の願を根拠となすということは、称名は、つねに諸  
仏の称名咨嗟を根拠となし、それに導かれて成立するということである。具体的にいえば、親鸞の信仰体験は、つね  
に法然の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」〔歎異抄〕第二条・「聖典」(六二七頁)という教言との値遇  
を決定的な縁とするものである。そして、その法然は、善導の「散善義」の、

一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名  
づく、かの仏願に順ずるがゆえに。〔聖典〕(一二七頁)

という教言に出遇って、余行を捨てて念仏の一行に帰して、「ただ念仏のみ」の信念を獲得されたのであった。そう  
すると、

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したまう。

〔大経〕・〔聖典〕四四頁

と誓われた諸仏称名の願成就文の「十方恒沙の諸仏如来」とは、本願念仏の教えに帰して生きる無数の念仏者のことである。その無数の念仏者、無量の諸仏が、みな共に阿弥陀如来の威神功德の不可思議なることを讃嘆し、われらに如来の大悲招喚に目覚ましめる真実の教言を聞き、本願の名号に帰して生きよ、と勧め励ますのである。われわれはその名号において、如来の功德を讃嘆する声を聞き、それに導き育てられて、歓喜に満ちた大悲への深い覚醒を賜るのである。本願成就の文の最初に、

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。

〔大経〕・〔聖典〕四四頁

と教説されている「その名号を聞きて」とは、無量の諸仏の如来の功德を讃嘆する声であり、その声に育てられて「信心歓喜」の一念が開かれるのである。

親鸞は、自らの信仰体験を踏まえて、本願成就文を独創的に読み取られたのであった。すなわち「信巻」で、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。〔聖典〕一一三頁

と訓み、さらに三心一心問答の仏意釈の信楽釈と欲生釈の下で、一つの本願成就文を前後に二分されて了解されている。

本願信心の願成就の文、『経』に言わく、諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん、と。

〔信巻〕・〔聖典〕一三八頁

本願の欲生心成就の文、『経』に言わく、至心回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。

〔信巻〕・〔聖典〕一三三頁

「本願成就文の前半を「本願信心の願成就の文」、後半を「本願の欲生心成就の文」とに分け、「至心回向」を「至心回向したまえり」と訓むことによつて、本願の成就は本願力の回向成就であり、如来の願心の回向成就であつて、それはわれら衆生一人ひとりにおける信心の成就の他ではない、ということを明らかにされたものである。しかもわれら衆生における信心の成就是、如来の欲生心の回向成就であることを尋ね当てた画期的なる了解である。「十方の衆生」を「心を至し信樂して我が国に生まれ」しめんと招喚し、「もし生まれざれば正覺を取らじ」と誓う本願の成就是、その本願招喚の聲に覺醒して、如来の願心に帰して生きたる娑命の信の成就の他ではない。信仰的自覺を開く名号のみでなく、名号に開かれる信心も、「如来の清淨願心の回向成就」であることを、親鸞は、いま明瞭に聞き当て尋ね当てられたのが、成就文の独創的な訓み方の意趣である。

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。知るべし。〔信卷〕・『聖典』一三三頁）

信仰的自覺における根本契機である名号のみでなく、名号に開かれる信心も、如来の願心の回向成就であるということとを、親鸞は本願成就の教説に感得されたのである。如来の願心を、いま現に發起している自らの信心として体験されたのである。

如来の願心と衆生の信心とは、確かに二つの事柄であるが、しかし信心と願心は体は一であり、回向成就として一如であることを、親鸞は、本願成就の教説に自覺的に感得し、自証されたのである。これが親鸞の信心理解で最も注意すべき一点である。「信卷」に展開される三心一心問答、すなわち世親自督の一心娑命の信と本願に誓われる「至心・信樂・欲生」の三心とは、信仰的自覺の事実と根柢として即一如であるという深義の推究と説明が、それである。

帰命の信と如来の願心とは回向成就として体は一であるという推究は、すでに「行巻」の名号釈において、

「帰命」は本願招喚の勅命なり。

〔聖典〕一七七頁

と言いつてられていたことである。帰命の信とは、衆生が如来に帰依信順する心であるというよりも、如来の「本願招喚の勅命」そのものである、と。如来がわれら衆生の煩惱自執心を打ち砕き打ち破つて、われらに名告り出る、如来そのものの現前現成である、と。如来自身の衆生における顕現、それが帰命の信なのである。このような帰命の信の表白を、浄土教の歴史に見るとき、世親の『願生偈』の表白に看取できる。世親は、世尊の根本教説である『無量寿経』の教説との値遇に獲得された帰命の信を告白されて、

世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安樂国に生まれんと願ず。

〔聖典〕一三五頁

と述べている。

いま、この「尽十方無碍光如来に帰命す」という信の表白は、実は「尽十方無碍光如来に帰命せよ」と招喚しつづけている如来の願心の現前であり、名号の顕現を内実としている、ということである。如来に帰命すという一心帰命の信とは、生死流転の無明の闇を根底から摧破して、尽十方無碍光の世界にわれを喚び帰さんと招喚しつづける如来の名告りを、いま深々と自証したという自覚体験である。帰命の信とは、無明の闇を破つて名告り出る如来の名号の顕現、すなわち本願招喚の勅命そのものの現前現成なのである。本願の信とは、端的には本願の名号の顕現以外の何ものでもない。この驚くべき確かな感得と自証を得たとき、親鸞は、大きな感動と感銘をもって、本願成就文を独創的に訓み、「至心回向」の願言を「至心に回向せしめたまえり」と訓むこととなつたのである。親鸞の本願成就文の理解には、このような驚くべき信仰体験と自証があつたのである。すなわち如来の願心が、いま厳然とこの身に顕現

し現成する事実、その如来なるものの圧倒的なはたらきの体験と自証を「至心回向」の教言に、親鸞は、いまはつきりと訓み取られたのである。『一念多念文意』における本願成就文の了解、就中「至心回向」の理解は、そのことを見事に伝えている。

「至心回向」というのは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ごころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

（聖典】五三五頁）

回向とは、本願の名号がわれら衆生に施与されているこの事実、如来が名号として如来自身を失わずして、われら衆生の行信となるこの事実、これが回向の具体的事実なのである。如来は名をもつて回向する、否、名として回向するのである。したがって、本願の仏道においては、名は単なる名ではない。如来の行であり、本願の行である。本願の行としての仏の名は、如来自身を失わずに衆生の行信になるのである。衆生の行信となるとは、名号の顕現としての信が発起するということである。本願の名号が衆生の行信として顕現し、現成するのである。親鸞が称名念仏を本願の名号に帰して、如来の無碍なる願心の現動する「大行」と了解された所以も、ここにある。無碍なる如来の願心が、いま「念仏もうさんとおもいたつごころ」というわれらの信心として名告り出、現成しているのである。

信心とは、このように基本的に本願の名号に開かれる「本願の行信」であり、名号そのものの顕現であるとすれば、信心に自証されるものは、如来の願心と願心の世界、すなわち如来自証の浄土の功德であるということも、至極当然のことといわなければならない。信心とは、つねに如来の願心と浄土の功德を自証している体験であり、自覚であるといわなければならない。このような自覚的体験を、親鸞は「回向成就」という独創的な表現で言い表したのである。信心とは如来の願心の回向成就である。それ故に、願心の回向成就としての信心には、十方の衆生を我が国に生らしめて、仏自ら正覚を取らんと誓いつづける法蔵菩薩の願心を、つねに深々と自証されていると同時に、撰取不捨の願心のはたらきに与かるものとなるのである。その事実を親鸞は、本願成就文の「即得往生」の教言を解して、次のよ

うに述べている。

「即得往生」というのは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわざるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

(『念多念文意』・『聖典』五三五頁)

親鸞の本願成就文の領解によれば、本願の成就とは、本願の名号を聞き、聞名に獲得される歡喜の信心の成就より他にないが、信心が何故に歡喜であるのかといえは、名号の信に「無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわざる」自己を見出し、「とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまる」、すなわち「往生をう」るからである。「得往生」とは、本願の行信の獲得において、われらの無明の生は突き破られて、尽十方無碍光の世界に転成されて、真如一実の功德の施与された生を生きるものとなることである。このような転成された生、無上涅槃に開かれた生を、親鸞は、龍樹の「即時入必定」とか、曇鸞の「入大乘正定之聚」の教説に導かれて、「現生正定聚」と解されたのである。親鸞は、本願の行信に実現する生を、現生に正定聚に住する生と了解し、それは「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」と言い切つて、「大般涅槃無上の大道」に立つ生であることを、深い確信をもつて語り続けるのである。「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」生を、親鸞は「即得往生」の内実であると解されたのである。

本願の信の根源としての本願の名号のはたらきについて、親鸞は「行卷」の標拳の文において、「浄土眞実の行」と掲げられた。「浄土眞実の行」とは、浄土眞実の功德をわれら衆生に開示し、回施する行という意味ではあるまいか。念仏を往生浄土の行と解する浄土教の伝統を承けつつ、親鸞は、念仏の意義を一層根源化して「本願の名号」と

捉え、その行の意義を「浄土真実の行」と了解されたのである。「真仏土卷」の最初に、

謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなわち大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土と曰うなり。〔聖典〕三〇〇頁)

と述べられているように、浄土とは「大悲の誓願に酬報する」報仏報土であり、本願成就の世界である。その本願成就の世界である「無量光明土」としての浄土を、われら衆生に開き示す行という積極的で創造的な意味を託して「浄土真実の行」といわれたのであろう。全く光明の世界を見失って無明海に沈淪するわれら衆生に、無量光明土としての真実功德のはたらく世界を開示する法、すなわち本願の名号のもつ積極的に創造的な意味を、親鸞は「浄土真実の行」と言われたのである。

### 三

本願の行信の獲得において、何を待て、何を生きるものとなるのであろうか。すでに指摘したように、親鸞は、真実の行（大行）について「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」〔行卷〕・『聖典』一五七頁)「円融真妙の正法、至極無碍の大行」〔行卷〕・『聖典』一九三頁)といい、また真実の信(大信)については、「証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり」〔信卷〕・『聖典』二二頁)と解されたのであった。行・信のみでなく、真実の教についても「一乗究竟の極説、速疾円融の金言」〔教卷〕・『聖典』一五四―一五頁)といい、真実の証についても「利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり」〔証卷〕・『聖典』二八〇頁)といって、往相回向の四法に成立する往生の生の内実を、親鸞は基本的に「大般涅槃無上の大道」に立つ生であると解されたのである。しかも「大涅槃を証することは、願力の回向に籍りてなり」〔証卷〕・『聖典』二九八頁)といわれるように、証大涅槃としての往生は、如来の二種の回向に成立し実現するものであった。

『正像末和讃』に、

無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること

如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし

と詠われ、また『浄土三経往生文類』で、

如来の二種の回向によりて、真実の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらしいに住するがゆえに、他力ともうすなり。  
(『聖典』四七一頁)

といわれているように、真実信心の獲得は、ひとえに如来の二種の回向のはたらきに縁る。曇鸞の『浄土論註』で「回向に二種の相あり」といわれたのを、親鸞は「二種の回向あり」といつて、はつきりと「二種の回向」といわれたのは、流転する衆生を本願の行信によって現生に正定聚に住せしめ、必至滅度の無上涅槃道に立たしめる如来の往相回向は、「如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまう」(『証卷』・『聖典』二八〇頁) 応化の如来、すなわち如来の還相回向を根拠として初めて成就するものである、ということを明瞭にされたものである。往相の回向と還相の回向は、相対的に並べられてあるものではなく、往相回向は如来の還相回向を根拠として真に成就するものである、というべきである。

親鸞は、如来の二種の回向に成立する仏道を「浄土真宗」と顕揚し、往相回向の四法に開かれる生を「即得往生住不退転」と解し、その往生の生の内実を、現生正定聚・必至滅度・証大涅槃と了解されたのである。いま注意すべきは、「証卷」で、

正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

といわれ、また『浄土三経往生文類』では、

現生に正定聚のくらしいに住して、かならず、真実報土にいたる。

(傍点筆者・『聖典』二八〇頁)

(傍点筆者・『聖典』四六八頁)

といわれている「必ず……至る」の意味である。「必至」の道理を厳密に確かめなければならない。何故なら、それは現生に正定聚に住し、命終ののち真実報土に往生するのである、と解され易いからである。もしそのように解するならば、親鸞の意図する意趣から遠く離れてしまうであろう。しかしまた、もし煩惱具足の凡夫の身が直ちに無上涅槃を証したというのであれば、これも親鸞の意趣から大きく離れてしまうからである。「必至」の言は、単純な未來を意味する言葉ではなく、また単純な即時を意味する言葉でもない。『浄土三経往生文類』で「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」（『聖典』四六八頁）といわれているように、正定聚と滅度は願因と願果の関係であって、「必至」の言に内含まれている必然の道理を明らかにしなければならない。願因・願果というのは、因も果も本願海等流の因果であって、その意味では因果は同質であり、一にして不可分である、ということを意味している。しかしまた、因と果として解されている限り、因は因であり、果は果である、という意味も失ってはならない。そのような因と果、正定聚と滅度の内的必然関係を表す言葉が「必至」の言である。

親鸞は、『尊号真像銘文』で『大無量寿経』の「必得超絶去 往生安養国」の「必」の言の意味を尋ねて、  
必はかならずという。かならずというはさだまりぬというところなり。また自然というところなり。

（傍点筆者・『聖典』五一四頁）

といい、また同じく『大経』の「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」の「自致不退転」の教言を釈して、

「自致不退転」というのは、自は、おのずからという。おのずからというは、衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらしいにいたらしむとなり。自然ということばなり。致というは、いたるといふ、むねとすという。如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらしいにいたらしむるをむねとすべしとおもえとなり。不退というは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらしいなり。これすなわち正定聚のくらしいにいたるをむねとすべしと、

ときたまえる御のりなり。

(傍点筆者・『聖典』五二二頁)

と解されているように、「必」は、如来の本願力によって決定される「至滅度」を意味する言葉であって、本願の行信を獲た人の身に自然に自証される如来の功德である。

「必至」の言は、時間的表象としてはたしかに未来を意味し、必ず至るであろう、という意味である。しかし願力自然を表す「必至」は、必ず至るであろうという単純な未来ではなくて、必ず至るものとしてすでにさだまっているということの意味している。親鸞は、「必」の意を尋ねて、「かならずというはさだまりぬ」というころなり。また自然というころなり」と解し、そのときの「自然」の「自」について、「衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり」といって、願力自然を表すものと解されている。願力自然を表す「必」であるから、「必」により決定される「至滅度」は、すでに念仏往生の願因において内感される願果なのである。「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」といわれた「必」は、住正定聚と必至滅度の「住」と「至」の現在と未来の分際を明示するとともに、その分際のままが連続しているという内的必然関係を表すものである。現在が未来に連続し、未来は現在に始まっているのである。

「往相回向の心行を獲れば」、すなわち選択本願の行信において、信心の行人は「即の時に大乘正定聚の教に入り、正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」と、親鸞は力強く断言するのである。大乘正定聚の教に入り、必ず滅度涅槃に至る生が与えられること、それを親鸞は、大経往生・難思議往生と解したのである。『大無量寿経』の本願と本願成就の教説に開かれる往生は、滅度涅槃に究竟する生の施与を、その内実とするものである。滅度は、言うまでもなく無生である。したがって、この生に即して「無生の生」が施与されることが難思議往生である。無生の生が本願の行信の利益としてわれらに開かれ与えられる、それが大経往生・難思議往生の最も大きな特質である。しかもそれは、偏に本願の不思議、本願の不可思議力によるものである。

#### 四

正定聚は、元は阿弥陀の浄土で得る利益であった。第十一願成就文を一般には、

それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。

〔大経〕傍点筆者・『聖典』四四頁

と読まれて、正定聚は浄土の功德を意味するものであった。曇鸞は『浄土論註』の初めに、龍樹の易行道の教説を承けて、

易行道は、いわくただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願す。仏願力に乗じてすなわちかの清浄の土に往生を得。仏力住持してすなわち大乘正定の聚に入る、正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。(『真聖全』一・二七九頁) といつて、正定聚を浄土の功德として解されている。

しかし親鸞は、本願の行信の現在に、現生に正定聚に住すると、深い確信をもって力を込めて語り続けるのである。第十一願成就文の「生彼国者」を「かの国に生ずれば」と読む一般的な訓み方に対して、親鸞は『一念多念文意』で、それ衆生あつて、かのくに生まれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆえはいかんとなれば、かの仏国のうちには、もろもろの邪聚および不定聚は、なければなり。

(傍点筆者・『聖典』五三六頁)

と訓んで、きわめて積極的に第十一願成就文の意味を訓み取られたのである。「かの国に生ずれば」と訓めば、「者」は添え字で虚字である。しかし親鸞のように、「かのくに生まれんとするものは」と訓めば、「者」が実字となつて、「生まれんと欲する者は」という意味になる。つまり願生者となる。親鸞は、「浄土に生まれた人」ではなく、「生まれんと欲する者は」と訓み取つて、「者」を本願の信に目覚め立った者、すなわち本願の信を獲た機の成就を示すものと解されたのである。そうすると、第十一願の願文だけを見ると、住正定聚の願というべきかとも考えられる。

しかし親鸞は、この願をそのように捉えないで、「必至滅度の願・証大涅槃の願」と了解されたのである。その意趣を明瞭にしなければならぬ。第十一願は、住正定聚を誓うのが主であって、兼ねて必至滅度を誓うものであると解され易い。ところが親鸞は、この願の主意は、われら衆生を滅度に至らしめることであって、滅度涅槃に至る機を正定聚の機であると解するのである。

住正定聚の機は、第十一願であるよりも、第十八願成就の教説に成り立つのである。至心信樂の願の成就、すなわち「至心信樂欲生我国」の本願招喚の勅命に喚び醒まされることにおいて、正定聚の機が成就するのである。第十一願を必至滅度の願と解された根拠は、第十一願・第十七願・第十八願のそれぞれの成就文に立ったからであるが、殊に第十八願成就の文より第十一願成就文を見られたからである。第十八願の本願成就の教説に立つて第十一願を見たとき、初めてそれが住正定聚の願であるよりも、必至滅度の願であり、証大涅槃の願であるという意味を深々と証知されたのである。それはどうしてであるかといえ、第十八・至心信樂の願成就文に「願生彼国 即得往生 住不退転」と教説されているが、その「即得」の「即」が如何なる意味であるかを、親鸞は嚴密に推究されたからである。「聞其名号 信心歡喜 乃至一念」といわれているように、本願の名号に開かれる信、如来の願心の回向成就としての信心であるから、往生は「即得」であると、親鸞は尋ね当てたのである。「信心をうればすなわち往生すという」（『唯信鈔文意』・『聖典』五四九―五〇頁）といわれ、また「信心のさだまるとき、往生またさだまるなり」（『末燈鈔』・『聖典』六〇〇頁）といわれるように、信心決定のとき「即」に正定聚不退の位に住するのである。本願成就の教説に立てば、正定聚は、單純に淨土の徳ではなく、むしろ信心の徳なのである。信心の功德として住正定聚を領解する、それが現生正定聚ということの意味である。

往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の教に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

「往相回向の心行」すなわち本願の名号に帰する一心帰命の信、さらに厳密に言えば、本願の名号の顕現としての信において、「即の時に大乘正定聚の数に入る」のである。「数」とは、浄土の大会衆の数に加えられるという意味であり、浄土の人民としての「くらい」が与えられるということである。われら衆生から求めたものは邪定聚であり不定聚である。如来から施与された新たな生が正定聚である。

正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。 (『念多念文意』・『聖典』五三五頁)

すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時人必定ともうすなり。 (『同』・『聖典』五三六頁)

といわれるように、往生とは、親鸞においては、何の議論の余地もなく、本願の行信に開かれる全く新しい生の始まりである。住正定聚のところは無上涅槃に立って生きる、滅度涅槃に究竟する生の始まりを意味する。親鸞は、『大經』に教説される難思議往生、すなわち真実報土の往生を、現生正定聚・必至滅度として内容づけ、往生を単に往生浄土として語るよりも、はるかに力を込めて現生正定聚・必至滅度・証大涅槃として語り続ける親鸞の意趣に、われわれは甚深の注意を払うべきである。

## 五

それでは、住正定聚のところは無上涅槃の功德が自証され、無上涅槃に立って生きる生の始まりであるというとき、その無上涅槃の功德とは何であろうか。一言にしていえば、それは如来自証の浄土の功德である。

親鸞は、「真仏土巻」の最初に、

謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすな

わち大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土と曰うなり。すでにして願います、すなわち光明・寿命の願これなり。  
〔聖典〕三〇〇頁

といて、仏身も仏土ともに「光明」をもって了解されている。「不可思議光如来」「無量光明土」といって、仏身・仏土ともに光明をもって讃嘆し顕揚されている。古来身土不二といわれて、仏身と仏土、如来と浄土は決して別々の範疇ではなく、二にして一であって不可分である。したがって不可思議光如来に帰命する信は、そのまま無量光明土を見出した自覚に他ならない。無量光明土は無上涅槃の世界であり、如来の智慧の光り輝く限りなき光明の世界である。

「涅槃界」というは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。「界」は、さかいという。さとりをひらくさかいなり。  
〔唯信鈔文意〕・『聖典』五五三頁

浄土は無上涅槃の世界であって、それは、われら衆生の「無明のまどいをひるがえして」「ひらく」「さとり」の「さかい」である。しかし浄土は、無上涅槃の世界であるが、真実功德を体とする如来自身のはたらきと決して別なる世界ではない。帰命尽十方無碍光如来という本願の行信は、尽十方無碍光如来に帰命するという信に、本願酬報の土である真実報土が自証され開示された自覚なのである。尽十方無碍光如来に帰命した信は、「無明のまどいをひるがえし」、いわば無明が摧破された自覚であるから、それは同時に、尽十方無碍光という無量光明土が開き示された自覚でもある。親鸞において真実の浄土とは、帰命尽十方無碍光如来の信に自証される尽十方無碍光の世界であり、無量の光明土である。

如来の自内証の世界である無上涅槃の功德が、「如来の願心の回向成就」である本願の行信において、真如一実の功德としてわが身の上いきいきと現前し現成する事実を、親鸞はきわめて深い確信と感動をもって表白されている。例えば、如来の不虛作住持功德の教説の意義を尋ねるなかで、

よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人の、そのみに満足せしむるなり。如来の功德のきわなくひろくおおきに、へだてなきことを大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしと、たとえたとえつるなり。

〔尊号真像銘文〕傍点筆者・『聖典』五一九頁

しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。

〔一念多念文意〕傍点筆者・『聖典』五四四頁

といい、また住正定聚の人に開かれる功德を尋ねて、

安樂淨土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信ずる人にえしむとしるべしとなり。(中略)念仏の人は無上涅槃にいたること、弥勒におなじきひとともうすなり。

〔同〕傍点筆者・『聖典』五三七頁

如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。

〔同〕傍点筆者・『聖典』五三九頁

といわれている。

本願の行信の自覚的な表白である「帰命尽十方無碍光如来」、この行信が、行・信ともに如来の清淨願心の回向成就であるから、名号は本願成就の「至徳の尊号」と仰がれるのであり、その尊号のもつ「真如一実の功德宝海」を行信に帰した人、すなわち「金剛心のひと」の上に、「すみやかにとく」「かならず、もとめざるに無上の功德」を極速円満せしめるのである。親鸞は、本願のもつ最も根源的で積極的な力用を「誓願不思議」と言い表されたように、名号のもつこのような根源的で積極的な不可思議のはたらきを「名号不思議」といわれたのである。誓願不思議・名号不思議というときの「不思議」とは、ただ凡夫の心が及ばないということだけでなく、本願の名号を信ずる一念に、その信心の行人の上に如来と如来自証の無上涅槃の世界が極速に円満せしめられる事実を言い当てた表現なのである。このように本願の名号の信に実現する仏道は、基本的に大般涅槃無上の大道であった。本願の行信において、現生に

正定聚に住して無上涅槃に究竟する生を生きるものとなるのである。この事実を親鸞は、「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」といい、或は「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたる」と、深い確信をもって断言されたのである。

本願の行信を大地として実現する生、すなわち正定聚の機と転成された生は、如来の大悲往還の回向に開かれた生であるから、この生は自ずから、一心願生の仏道を歩み生きようとする強靱な意欲を生むのである。かつて世親が「帰命尽十方無碍光如来」と帰命の信を告白されたとき、その一心帰命の信は、自ずから、

普くもろもろの衆生と共に、安樂國に往生せん。

〔淨土論〕・聖典 一三八頁

と、一心願生の仏道に立たれたと同じように、願生淨土の仏道を生きようとする意欲と情熱を生むのである。本願の行信は、ただ一心帰命の信に止まるものではない。帰命の信は必ずや願生の信として展開し相続するものである。「願生」とは、文字通り如来の本願を生きる、如来の願心を自証するがゆえに、如来の願心を行証せんとする意欲である。願生の信とは、帰命の信に自証された淨土の功德を、この穢土の直中で最も主体的に生き、力を尽くし身を挙げて行証しようとする意欲である。何故かといえば、信心に自証される如来の願心は、「設我得仏 十方衆生」と十方の衆生を喚びかけて、「至心信樂 欲生我國 乃至十念」と招喚し、「若不生者 不取正覺」と誓い続ける久遠の願心であった。しかもその願心は、法藏菩薩において発願され誓われている、まさに大悲の願心であった。いま、その大悲の誓願に覚醒された帰命の信は、自ずからその願心を身のすべてを挙げて行証しようとする意欲に生きるものとなるからである。帰命の信は、このように必然的に願生の信として展開し相続して止まないものである。一心帰命の信に信心の自覚性があるとすれば、一心願生の信に、その能動性があるといえる。

信心のもつこのような能動性・力動性に注目するとき、大悲往還の回向に開かれる行信の仏道は、必然的に行証の仏道として、本願の行証道としての積極的な意義を内に蔵しているといえる。行証としての能動性をもたない行信は、

主観的で観念的であって、真実の仏道とはいえない。親鸞が「信巻」で『大悲経』の文を引用して、信心の行人を「大悲を行ずる人」（『聖典』二四七頁）といい、また現生十種の益で「常行大悲の益」（『聖典』二四二頁）といい、さらに真仏弟子釈で「金剛心の行人」（『聖典』二四五頁）といわれているのは、すべて一心願生の仏道、すなわち行証の仏道に目覚め立った信心の行人を言い当てた言葉であろう。「大悲を行ずる人」とか「金剛心の行人」というときの「行人」とは、文字通り、如来の大悲願心に深々と帰し、帰したからこそその願心を身のすべてを挙げて行証している人を意味する。しかも「普くもろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん」といわれたように、あらゆる衆生と共に生きんという、願生浄土の自覚道に生きる人を意味している。

信心は、それが本願の名号に覚醒された信であり、本願の名号の顕現としての信であるかぎり、必ず行信から行証へとという能動性をもつものであり、如来の大悲心を行証する人、すなわち「金剛心の行人」を生むのである。本願の名号に開かれる行証の仏道は、実は願生浄土の自覚道なのである。生死無明海に流転しつづけるわれら衆生の虚妄の生を転じて、願生浄土の一無碍道に立たしめる如来の回向、それが大悲往還の二種回向であり、二種の回向に開かれる本願の行信である。その行信が、いま行証として能動するのである。

ところで、このような一心願生する信、すなわち普くもろもろの衆生と共に本願を生きんとする意欲を生んで止まない行信・行証の仏道は、法然が興隆された念仏往生ないしは往生浄土の仏道の、親鸞におけるたしかな継承であるが、しかしその仏道理解をはるかに超える視点のあることを見落してはならない。言うまでもなく、「よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」（『歎異抄』・『聖典』六二七頁）といったつづける親鸞にとつて、法然興隆の念仏往生、往生浄土の仏道がたしかに「浄土の真宗」であった。しかし親鸞がいま自覚的に目覚め立った本願の行信・行証の仏道は、法然の仏道理解を継承しながら、それを一層根源化し、より積極的に願生浄土の仏道と捉えていることを看過してはならない。親鸞が開顕し顕揚された「浄土真宗」は、往生浄土の仏道であるに止まらず、よ

り積極的に願生浄土の仏道である、と了解しなければならぬ。

「一切苦悩の衆生海を悲憫し」(『信卷』・『聖典』二二五頁)「悲憐し」(『同』・『聖典』二二八頁)「矜哀し」(『同』・『聖典』二二三頁) つづける如来の大悲願心の回向成就、それが帰命の信であるから、その信心は大悲願心に相応しようとする行証の意欲に促されて、「普くもろもろの衆生と共に」という「共に」の志願に立って、安楽浄土を生きる人となるのである。大悲願心の回向成就、本願の名号の顕現としての信において、一切苦悩の群生海を「われら」と自覚して、「共に」本願成就の安楽国に生きんと意欲して、願生浄土の自覚道を歩むものとなるのである。このような「大悲を行ずる人」「金剛心の行人」を生み出す仏道が、本願の行信の一道であり、本願の行信道が、このような願生浄土の自覚道としての実質が確証されたとき、親鸞は「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」(『末燈鈔』・『聖典』六〇一頁)と言いつつ、群萌に開かれた唯一の大乗の自覚道である、と顕揚し続けたのである。